

# 幼稚園における鍵盤ハーモニカの指導法に関する調査研究（2）

— 「遊び」を用いて —

## Instructions for method of teaching children how to play keyboard harmonica（2）

— enjoyable exercise for children —

仲田 久美子

NAKADA Kumiko

[キーワード Keyword]	幼稚園, 学校教育, 小学校, 指導方法, 鍵盤ハーモニカ
[所属 Institution]	岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

### [要 旨 Abstract]

本研究では、岐阜県内の私立幼稚園での鍵盤ハーモニカ指導について調査を実施した結果の分析のまとめとして「遊び」を用いた指導方法を考察している。本研究の目的は、子どもの発達に合う鍵盤ハーモニカの指導法を考案することをテーマとし、アンケートの自由記述や実際の取り組み例を参考にしながら「遊びの要素」が鍵盤ハーモニカの指導にどのようにいかにせるかについて考察し、指導法を提案することである。本論では、はじめに、鍵盤ハーモニカの導入の実態についてこれまでに実施したアンケート調査の分析時に用いた区分について述べ、次に、アンケートの記述欄で「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」というような言葉を記述した園の自由記述を抽出している。そして、鍵盤ハーモニカの指導において有効だと思われる手遊びや指遊びについて考察している。さいごに、まとめとして、幼稚園での鍵盤ハーモニカ指導で取り入れたい5つの遊びを紹介している。

## 1. はじめに

### 1.1. 区分について

前回の「幼児期の音楽教育についての調査」の間3. 「鍵盤楽器の指導についての設問」のうち、基本的事項として質問した「使用楽器や指導環境、吹き口の形状、練習時の姿勢」以外の「【その他】理想や希望と異なる事や指導がむずかしいと感じる時があるかどうか」についての自由記述欄から「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」というような言葉をキーワードとし、これらが含まれた記述を抽出した。今回も本論では、調査研究（1）で用いた5つの区分「a1、a2、b1、b2、c」に分類して考えていく。改めてそれらの区分を確認するために、下記に5つのグループとその内容、そして（ ）の中は園番号（アンケート回収後、便宜上、無作為で回答用紙につけた）を記載する。※aは「定期的に指導を実施している園」、bは「不定期に指導を実施している園」、cは「指導を実施していない園」として分類している。

- a1：定期的に指導を実施し、指導が難しいと感じたことはない園。（園番号1～園番号7）区分1
- a2：定期的に指導を実施し、指導が難しいと感じる時がある園。（園番号8～園番号13）区分2
- b1：不定期で指導を実施し、指導が難しいと感じたことはない園。（園番号14～園番号22）区分3
- b2：不定期で指導を実施し、指導が難しいと感じる時がある園。（園番号23～園番号43）区分4
- c：指導を実施していない園。（園番号44～園番号49）区分5

まず、1つ目の区分である『a1：「定期的に指導を実施し、指導が難しいと感じたことはない園』』という7園の自由記述欄については、いずれにも「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」というようなキーワードが見当たらなかった。そのため、a1の7園については、今回の調査研究（2）の調査対象から省いた。次に2つ目の区分である『a2：「定期的に鍵盤楽器を教えており、指導を難しいと感じる時があると回答した園』』の自由記述欄では、6園中4つの園で「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」というようなキーワードが見ら

れた。下記に園番号と記述内容、そして内容の後にはその園の特徴を簡単にまとめる。なお、アンケートの記述欄から引用する際は原文のまま転記している。そのため、「あそび」という文言をあえてひらがなで表記することがある。

## 2. 「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」というキーワードについて

上記の3つのキーワードが含まれている記述を探して先述の5つのカテゴリーに分けて挙げていく。

### 2.1. 「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」という記述について (区分：a1)

園番号8番：「楽しく学べるよう工夫している」

具体的に「どのような工夫をこらした指導法を実施しているか」については情報が不足しているためよく分からないが、楽しく教えてあげたいと考えていることが伺える。どのような指導方法をしているのか、今後、情報を得て、その方法を共有できるとよい。

園番号11番：「日常生活の中で、遊びとして、とり入れていくようにはしているのであるが、なかなか継続させてやっていくことができない。(どうしても行事の為になってしまう。)教師の子どもへの指導方法が分からず、どのようにすれば、楽しくできるか、学んでいきたいと思っている。

この園では、子どもが楽しんで取り組んでいるのかについて考えようとしていることが読み取れる。普段から鍵盤楽器習得の際、「遊び」の要素を取り入れて指導しているようであるが、行事の準備に取り掛かることでそれが中断されてしまうことが悩みのようである。

園番号12番：「幼児期に立奏用吹き口を使用することは、本来なら難しいと感じています。本園は鼓笛をとりいれているため、行っていますが、今後のカリキュラムのみなおし等で、年児にあわせたとりくみについても考えていきたいと思います。幼児期の鍵ハ指導は、音がでる、楽しいと感じることからスタートしていますが、個人差、理解力もそれぞれ違いますので、同じ指導のしかたのみでは、子どもたちが鍵ハを嫌いになってしまうこともあるので、個別にほめながら、一緒の時間を共有でき、“できた”喜びが味わえるようにと思っています。“差”を感じるの子どもなのか教諭なのか…。どちらにも“できた”“楽しい”と思えるような働きかけが必要と感じ動いています。」

この園では鍵盤ハーモニカの指導を「音が出る」「楽しい」という気持ちにそってスタートさせようと試みているようである。鍵盤ハーモニカを演奏することが嫌にならないようにほめたり、できた喜びを味わうことに重点を置いていることが分かる。導入時の「楽しい」という印象が続くための工夫を施して園児に寄り添う姿が感じられる。

園番号13番：「卒園時までどのレベルまで、それぞれの子の達成度をどこにするのか、“けんばんあそび”の範囲内でどこまで指導するのか悩む。」

この園は入園から卒園まで、そして小学校へと続く子どもの学びの到達について悩んでいるが、鍵盤ハーモニカの指導については「けんばんあそび」とし、「指導」という言葉を用いていない。この回答は、幼児期の鍵盤ハーモニカの指導方法を考えるうえで非常に重要であると思われる。

### 2.2. 「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」という記述について (区分：b1)

この回答をした9園は3つ目の区分『b1：「不定期に鍵盤楽器を教えており、指導を難しいと感じる時はない』』と回答した園についてであるが、これらのうち、1つの園で「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」と

いうキーワードが見られた。

園番号22番：「どの子ども一斉に同じレベルの使い方をしないで合奏などで効果的に使うことや、最初は打楽器的に楽しむことなどで興味をさそふことも必要と思う」

これは不得意な子に無理に弾かせないということの意味していると解釈する。しかし、鍵盤楽器が不得意だからといって合奏に参加させないわけではなく、きちんと他の楽器を楽しむことで音楽への興味を誘うことができる、と読み取れる。無理に鍵盤ハーモニカにこだわらないことから「指導を難しいと感じなくてすむ」という発想である。この方法であれば音楽自体を嫌いにならずにすむだろうし、このような寛容な視点から学ぶ点が多いのではないかと思う。

### 2.3. 「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」という記述について(区分:b2)

さらに、4つ目の区分である『b2:「不定期で鍵盤楽器を教えており、指導を難しいと感じる時があると回答した園」』の自由記述欄では、21園中、4つの園で同キーワードが見られた。

園番号36番：「幼稚園生活(あそび)の中で指導を行う」

「あそび」の中で指導を行う場合、「いかに子どもが興味を長く持ち続けられるか」、「子どもが本当に楽しいと思って取り組んでいるか」、「子どものやる気がどの程度持続できるか」、という課題が出てくると考えられる。これらの課題を解決するためには、綿密な指導計画を立てる他、子どもが「鍵盤ハーモニカの習得」と「あそび」の境界線に気が付かないようにしたい。本論文では、この園が感じている指導の難しさについて考え、解決策を見出していく。

園番号38番：「子どもによってできる・できないの差が激しく、楽しく練習を持ちかけることが難しいこともある。」

この園では、恐らく、できない子どもが鍵盤ハーモニカの練習に積極的に取り掛かれない点について、指導の難しさを感じているのだろうと思われる。このような苦手意識を感じる子どもがいる場合でも、楽しい導入方法や楽しい練習方法があれば悩みが減るのではないかと推察する。

園番号39番：「いかに子どもが『楽しい!!』と感じるかがだいじだと思っている。」

この園では、第一に子どもが楽しいかどうかを大切に考えていることが分かる。教える中に楽しさがあることを重要にしているのだろうと推察できる。

園番号40番：「音が出るのが楽しいと感じてもらうことが1番ですが、その後音を奏でることが楽しいと思えるように進めていきたいが、得手不得手があるので無理ができず、差が開いてしまうこと。」

この園では、音が出ることを楽しませることを一番大切にしている、とのことであるが、得手不得手があり、習得の過程で子ども一人一人の能力差が開くことに困っているようである。演奏を楽しめるようになるまで保育者が導いていくのは大変な苦勞があるのではないかと推察する。

### 2.4. 「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」という記述について(区分:c)

さいごに、『区分c:「鍵盤楽器を教えていないという回答をした園」』の自由記述欄では、6園中2つの

園で「遊び」「楽しむ」「からだを動かす」というようなキーワードが見られた。

園番号44番：（鍵盤楽器は）「教えていないけれども、演奏する楽器の1つとして、遊びの中にとり入れることはある」

恐らく、この園では演奏する楽器が他にあると推測する。いくつかの楽器のうちの1つに鍵盤ハーモニカがある、というようであり、遊びの中に取り入れているということなので「義務的」に教育してはいないということになる。そのため区分はcであり「鍵盤楽器を教えていない」のカテゴリーに入っている。

園番号48番：「まずは、体を動かして遊ぶことからジグができ、自然と指さきも器用になってくると思うので、まずは体を動かす！！が中心のためです。」

この園では幼児のからだの発達为中心から末端へ広がっていく発達を考慮しているのか、先に体幹を鍛え、その後で指先の感覚を磨いていく教育方法のようである。この園も「鍵盤楽器は教えていない」というカテゴリーcに該当する園ではあるが、前述の園番号44番とは少し異なり、園番号48番は全く鍵盤ハーモニカを取り扱っていない園（園番号45番から49番）の部類に入る。

上記の2つの園の記述にあるように「からだの動きの能力を高めることや指先の器用さのトレーニングを優先させることが先だ」と考える園では鍵盤楽器を指導しない方針であった。

### 3. 幼児の様々な遊びを取り入れた鍵盤ハーモニカ指導法について

前回のアンケートの分析結果により、幼稚園で鍵盤ハーモニカを教えている園が比較的多いことや、多くの園で教えることに苦勞していることが分かっている。また、園によって「表現」という領域の考え方や保育内容が異なり、中には鍵盤ハーモニカの指導はしないという方針の園があることも分かっている。今回は、アンケートの自由記述欄に3つのキーワード「楽しむ」「遊び」「からだを動かす」がどれくらい含まれているかに着目して分析し、「鍵盤ハーモニカの指導がよりスムーズになるような方法はないか」について考察し、「からだを動かすこと」や「遊びを取り入れて」という活動を中心にした「鍵盤ハーモニカの指導方法（導入含む）」について考えていく。

#### 3.1. 幼児の様々な指を使う遊び

##### ① 指あそび全般

##### 1. 『グーチョキパーでなにつくろう』

じゃんけんのグーチョキパーを用いた指遊びの歌（「手あそび指あそび120」pp.66-67、「伝承遊び大百科」pp.234-235）である。この遊びでは、手の様々な形を作ることで手全体の筋肉を意識できるようになることが期待される。原曲はフランス民謡の「フレール・ジャック」であるが、開始音を中心とし、最高音は長6度上、最低音は完全4度下までである。幼児が正しい音程で歌うには少々難しいかもしれないが、旋律を正しく歌うことより、手の形を拍に合わせてテンポよく動かせるようになることを目標としたい。

##### 2. 『ずいずいずっころばし』（「伝承遊び大百科」pp.78-79、「手あそび指あそび120」pp.138-139）

この曲は、伝承遊びの一つで、幼児の間でも比較的高い知名度の高い遊びである。鍵盤ハーモニカの練習のためにこの遊びを利用するのであれば、あえて人差し指は使わずに別の指を用いて行うことを推奨したい。あえて使いにくい指を使用することで、指と指とを分離させるために役立つだろうし、指の一本一本を独立させることの助けにもなるだろう。

##### 3. 『おべんとうばこのうた』

手遊びのわらべうたに『おべんとうばこのうた』（「手あそび指あそび120」pp.46-47）という曲がある。

この曲は数え歌で、歌詞に合わせて指で数を表す動作をする。その時に指を分離させて動かすため、幼児が指を意識的に動かすためのトレーニングになるとと思われる。この曲には厳格に定められた音程の旋律がなく、低年齢の幼児でも音程を気にすることなく歌うことができる歌であることから、幼児でも比較的取り組みやすいのではないかと考える。

#### 4. 『とことこにんじゃ』

この曲は、作詞が藤本ともひこ、作曲はケロポンズの増田裕子による手遊びの歌である（「手あそび大作戦！」pp.8-9）。歌に合わせて人差し指と中指を動かして遊ぶ手遊びで、右手を使用する場合は、人差し指を左脚に、中指を右脚に見立てられ、もし左手で行う場合は人差し指は右脚に、中指は左脚に見立てられるが、鍵盤ハーモニカのトレーニングとしては右手を使用したい。歌詞は「とことこことこ とことこにんじゃ とことこことこ とことこジャンプ！」で、「とことこ」で走り、「にんじゃ」で止まり、「ジャンプ」の部分で高くジャンプする指の動きを歌に合わせて行う。テンポを速くすると難易度が上がるので、幼児の様子を見てテンポを速めることでより一層楽しく遊べるのではないかとと思われる。また、速く走れる指以外の動かしにくい指で行えば、更なる指のトレーニング効果が期待できる。

#### 5. 指のダンス（「シニアが楽しむちょっとしたリハビリのための手あそび・指あそび」pp.60-61）

親指以外の指を使う指遊びである。方法は、①影絵のキツネの形を作り、机の上に両人差し指と両小指をつけて置く（中指と薬指は曲げたまま）。②次に、右手の人差し指を抜くと同時に左手の小指を曲げる。③次は右手の人差し指を抜き、左手の人差し指の上に重ね、それと同時に左手の小指の曲げたものをもとに戻す。④左手の人差し指を抜くと同時に右手の小指を曲げる。⑤最後に、左手の人差し指を抜き、右手の人差し指の上に重ねると同時に、右手の小指を曲げたものをもとに戻す。ここまでを一連の動作とし、「指のダンス」としている。左右の人差し指と小指は向かい側の人に見えるので、爪に顔を描いて楽しめるとあるが、幼児の場合は顔を描いたシールを貼って楽しむこともできるだろう。この遊びも指を動かすためのトレーニングとして有効であると考えられる。

#### 6. 指の拍手（「シニアが楽しむちょっとしたリハビリのための手あそび・指あそび」p.71）

両手の指と指で小さく拍手をする動作の遊びである。テキストには人差し指で拍手するところからスタートし、その後、1本ずつ順番に拍手する指を増やし、5本になったところを境にして、その後、拍手する指の数を減らし、最後に人差し指で拍手するところで終わる、という方法で実施するように書かれている。この指拍手は筆者が教員養成大学でピアノの初心者指導する際にも用いている遊びのひとつであり、指の番号と指を一致させるために、親指は1、人差し指は2、中指は3、薬指は4、小指は5、という指番号を口頭で指示を出して受講生に指で拍手を行ってもらっている。鍵盤ハーモニカは右手で弾くので必ずしも両手をういて指拍手をしなくてもよいのだが、指と指をくっつけようとするときに、他の指と一緒に動いてしまわないように手を固定する必要があるため、出来るだけ両手を使って指拍手を行いたい。幼児の場合で両手を固定しながら保持することが難しい場合は、右手を机の上に置いて「2」とか「1と2」など保育者の指示に従ってトントンと机をたたくだけでも十分な効果があると期待する。

#### ②あやとり（「伝承遊び大百科」pp.74-75）

手を動かす順番を覚えてできるようになるまで幼児には大変な面もあるが、指であやとりのひもがたるまないように突っ張ったままの体勢で手の形を保ったり、限られた指だけを使って外すべき部分のひもを外す動作は指先のコントロールや手の筋肉を意識したり強化するために有効であると考えられる。ただし、幼児で実践する場合はひもの取り扱いに充分注意が必要である。

#### ③影絵、手で何かの形を作る（「じいじとばあばのためのあそび図鑑」pp.34-35）

保育者が手本を示してあげながら、興味を持たせることができれば低年齢の幼児でも楽しめる遊びである。

関節の柔らかい幼児であれば比較的痛みも少なく、少し動かせば形を作ることができるだろう。『蛙』のような複雑なものを作る場合は、なるべく短い時間で作れるように保育者と子どもで競い合うと子どもがより一層楽しめるかもしれない。この遊びでは関節と関節を広げたり、指を別の指にひっかけて保ったりするため筋力が増強できることが期待できる。元来、指や手は広げていたほうが自然であるが、影絵や手で何かの形を作ろうとするときは手をすばめなくてはならない。その時、手を緊張させて形を保とうとする。その緊張した状態をなるべく長く保てるようになると鍵盤ハーモニカの鍵盤上に手を置いたときに形が大きく崩れてしまうことを避けられる。普段、意識的に使う頻度が少ない部位を使うことで関節を意識したり、手のストレッチにもなるので、鍵盤ハーモニカの練習時に用いる遊びとして有効だろうと予想する。

#### ④指人形、手袋人形（「ゆったり遊びじっくり遊び」pp.54-55）

指人形は素手で指先に小さな人形を付けてごっこ遊びをする遊びである。手袋人形は、軍手を用意し、軍手の手の平側の指先に顔のシールを貼って指人形のように楽しむことができる遊びである。指の一本一本を独立させたり、意識的に動かしたりする良いトレーニングになりそうである。

#### ⑤つみき（「伝承遊び大百科」p.94）

指先に神経を集中させて遊ぶつみきは知育玩具の一つである。指でつみきをつまむ動作は、指先を緊張させて手を内側に縮めるため、軽い緊張が必要となる。つまんで持ち上げたつみきを、狙いを定めて別の場所へ移動させる時は、腕や手首をコントロールして距離を測りながら、また力加減や置き場所を考えながらおく必要がある。もし、つみき遊びを持つ指を普段とは違う「使いにくい指を用いてつみきをつまむ」という条件にすれば、更に難易度が上がり、見た目以上に手の緊張度を高く保つことができる。つみき遊びは、指の関節の動きを自覚させるためのトレーニングになるだろう。

#### ⑥折り紙

折り紙は1枚の紙から色々な形へ姿を変えていく伝承遊びの1つである。折り目をしっかりとつけたときは指に力をこめ、角をきれいに仕上げたいときは指先に神経を集中させて角度をコントロールするため、巧緻性を養うために有効だと考えられている遊びである。ここで挙げる『ぱくぱく』（「ゆったり遊びじっくり遊び」pp.6-7）は、ほぼすべての指を使って動かす遊びで、自分が動かしたい箇所を意識的に動かさなくてはならないため、指の独立のための有効なトレーニングになると考える。

#### ⑦迷路たどり

戸次佳子は著書『「迷路－線たどり」における幼児の手指の巧緻性の発達』の中で「手指の運動発達は脳の発達と関係する。生まれてすぐの乳児は、成人のような手指の随意運動はできず、その後の幼児期から学童期にかけて指の巧緻性を発達させていく。」と述べている（p.177）。また、同論では、幼児の手指の巧緻性の発達を理解するためには、年齢差だけでなく性差についても考慮して検討していくことが重要であると、迷路（線をたどること）で手指の巧緻性を計り、検証している。このことから、鍵盤ハーモニカを演奏する準備のために、年少児から積極的に迷路たどりを活用したい。

#### ⑧おはじき（「伝承遊び大百科」pp.34-35）

同書には「おはじき遊びは、子どもに集中力をつけたり手先の器用さを養うといった効果があり、良さが見直されています。」と書かれている。おはじきをはじく指は、はじきやすい指だけに限らず、使いにくい指も交えてはじくようにしたほうがトレーニングになるだろう。

#### ⑨お手玉（「伝承遊び大百科」pp.38-39）

同書には、お手玉遊びの一般的な遊び方（おひとつ、と呼ばれる遊び方）は、「①お手玉を2つ用意し、1つを下に置き、1つを投げます。②投げたお手玉が落ちてくるまでに下に置いたお手玉を拾い上げ、2つ同時

に片手に持ちます。③拾い上げた方のお手玉を落とします。」と書かれている。この遊びでは、左利きの子どもも、使う手は右手に限定したい。指先の器用さを磨くための良いトレーニングとなると考える。

#### ⑩指ずもう（「伝承遊び大百科」pp.140）

この遊びは、親指のバネや筋力を利用して器用さを競う遊びであるが、幼児の場合は肩や腕を使って指の強さを競う遊びになりがちである。鍵盤ハーモニカで使用する右手に限定して遊ぶようにし、親指を意識させるように肩や腕をなるべく動かさないように事前に指示できると良いだろう。この遊びでは、特に、幼児の場合は、予めルールをしっかりと決めておき、爪をきれいに切り揃えてから行うことが重要である。

#### ⑪紙ずもう（「伝承遊び大百科」pp.214-215）

この遊びは、紙で力士の形を作り、その紙力士を土俵に見立てた箱の上で指の振動で動かして勝負を決める遊びである。「トントン」と箱を叩くことから「トントンずもう」と呼ばれることもある。鍵盤ハーモニカのためのトレーニングに役立たせるために、トントンと叩く指を比較的力の弱い指（例えば薬指や小指）に限定して行うと効果的だろう。

#### ⑫将棋倒し（「伝承遊び大百科」pp.134-135）

この遊びは将棋の駒を用い、少しずつ間隔を空けて駒を立てて並べていき、並べ終えた後に一番手前の駒を指で押すことで後続の駒が倒れていくというものである。この遊びでは、次に置く駒を置く際に他の駒に指や手が当たらないように（倒さないように）注意が必要である。幼児にとっては緊張感が強すぎてそれほど楽しめないかもしれないが、駒を置く動作と鍵盤ハーモニカを弾くときの動作の両方で指先のコントロールが問われるため、取り組んでもよいだろう。

#### ⑬結んでほどこいて（「2～5歳児あそびアイデア100」pp.70-71）

この遊びは遊び歌作家の小沢かづとによるひも通し・ひもむすびの遊びである。使う物は綿ロープで、子どもの人数分用意する。3歳児には保育者が固結びしたロープをほどこくという動作を、そして4～5歳児向けには、保育者が指示した数の結び玉を作らせる動作をさせ、ゲーム感覚で楽しめる遊びである。指先を使うことで器用さを磨く良いトレーニングになるだろうし、指先の強化も期待できる遊びである。

#### ⑭さわってさわって（「2～5歳児あそびアイデア100」pp.46-47）

この遊びは鈴木翼（遊び歌作家）によるもので、中身が見えない箱の中に色々な物を入れておき、幼児が箱の中に手を入れて物の名前を当てるゲームである。指先の感覚を頼りに物が何かを当てるので、指先に神経を集中させる必要がある。鍵盤ハーモニカを弾く右手で行うことで右手の指先の感覚を磨けるであろう。

#### ⑮いっぼん釣り（「2～5歳児あそびアイデア100」pp.26-27）

この遊びは大竹龍（江東区白河かもめ保育園主任）と小沢かづと（あそび歌作家）が考案した遊びで、友達とペアになり、指だけで物を運ぶ遊びである。保育室にある積み木やぬいぐるみやブロック等を持ち上げて運ぶのだが、さいごはチーム戦でどのチームが時間内にたくさん運ぶことができたかを競う。この遊びでも鍵盤ハーモニカを弾く右手を用いると良いトレーニングになり得るだろう。

### 3.2. 幼児の様々な息を使う遊び

#### ①かざぐるまを吹いて楽しむ

自分で風を起こしてかざぐるまを吹いて動かすことで、息の強さを目で見て実感することができる。吹くときにタンギングを意識させて「トゥ」の口で吹くことができるとより適したトレーニングになるが、幼児の鍵盤ハーモニカ演奏においては、タンギングを気にし過ぎるよりは、まず息を吹くこと体得させてあげたい。うまくできるようになったらできるだけ長く息を吐き続けてかざぐるまを回せるようにすると効果的な

トレーニングになるだろう。

### ②しゃぼん玉を吹いて飛ばす

かざぐるまとは少し違うが、自分の息を出すことでしゃぼん玉を作ることができる遊びである。ゆっくりと息を吐くことでしゃぼん玉の大きさが変わることを楽しめるようになると、保育者が鍵盤ハーモニカの指導時に「大きなしゃぼん玉を作る感じだよ」と声をかけることができ、子ども自身が息の出し方を振り返ることができるようになると期待できる。

### ③フーフーレース（「ゆったり遊びじっくり遊び」 pp.12-13）

折り紙で作ったヨットを使ってヨットレースを楽しむ遊びである。息を吹くトレーニングになる他、しゃぼん玉を吹いて飛ばすときと同様に、息の強さを実感できる遊びでもある。まっすぐ前に息を吹く練習として効果的なトレーニングになりそうである。

## 3.3. 幼児の様々なその他の遊び

### ①通しま仙人（「2～5歳児あそびアイデア100」 pp.36-37）

この遊びは小沢かづと（遊び歌作家）が考案した。オリエンテーリングのようなもので、数カ所のポイント（関所）で保育者が子どもたちにお題を提示してそれをクリアさせて先に進ませる遊びである。この数カ所の関所で出すお題を「鍵盤ハーモニカのドの音を吹いてみよ（使う指は自由）」としたり、「鍵盤ハーモニカのドの音を1の指で吹いてみよ」とすると、子どもがそれらのお題をクリアするために楽しんで習得できそうである。段階に応じて、最終的には何かの旋律が吹けるレベルまで続けることができれば、保育者も子どもも楽しく実施できそうである。晴れた日は野外で実施するとより一層楽しめそうである。

### ②すごろく（「2～5歳児あそびアイデア100」 pp.82-83）

すごろくは、さいころの目の数の所で止まりゴールまで進む遊びであるが、鍵盤ハーモニカ習得のためのすごろくでは、その止まった場所に「鍵盤ハーモニカ習得のために有効なトレーニングのお題」が書かれており、それをクリアしながらゴールまで進む、という鍵盤ハーモニカに特化したすごろくを考案したい。お題は①の「通しま仙人」の鍵盤ハーモニカ版と同様で、吹く音の場所を当てるものや、運指を確認させるものをお題とする。限られた時間内に終わらせたい場合はお題を少なく設定する。

### ③音当て（「2～5歳児あそびアイデア100」 pp.50-51）

鈴木翼（遊び歌作家）考案で「鐘が聞こえたのはだれ」という遊びである。音の出るもの（トライアングルやタンバリンや太鼓等）を子どもから見えない位置に置き、子どもには目を閉じさせておく。保育者が音を出して、何の音かみんなで当てる遊びである。直接的に鍵盤ハーモニカの演奏とは関係がないと思われるが、「黙って、集中して、音を聴く」という動作は楽器の演奏上、大変重要な動作であるので、試してほしい。

### ④コマ（「ゆったり遊びじっくり遊び」 pp.32-33）

指先を上手に使うつまみを回してコマを回すことで、普段使わない指を意識的に使うトレーニングとなる。※紐を巻いて回すタイプのコマではなく、指で回すタイプに限定される。

## 3.4. 遊びの要素を含むピアノのレッスン実践例から

### ①ぐっころんスポンジ（「ピアノレッスンアイデアBOOK」 pp.18-19）

これは、宮川美喜子（宮川音楽教室）が考案した手の脱力を習得するためのトレーニングである。使う道具は「食器洗い用のスポンジでふわふわしているもの」で、演奏前のウォーミングアップと脱力の習得のために考案された。トレーニングの方法は、まずじゃんけんのグーの形で軽く手をにぎり、「ぐっころんふわ～」と言いながらグーの手の形でスポンジの上に手を置き、その手を奥へ転がしてからふわっと上に抜くポ

ーズをするもので、シンプルな動作ではあるが、幼児の手や手首はこの動作でほぐれる。幼稚園でも、このトレーニングは大いに活用できるのではないかと思う。

### ②ゆびさきモフモフ（「ピアノレッスンアイデアBOOK」p.20）

これは馬場一峰（音楽教室PIANO@YOKOSUKA）が考案した指先の形を整えるためのトレーニングである。使う道具は髪を縛るために用いられている柔らかいゴムで、このゴムを「寝すぎてしまう指」に付けて弾くことで指の形が改善するというものである。鍵盤ハーモニカを弾く時に手が大きくぶれてしまう子どもの指に装着してあげると手の形が安定するだろう。幼稚園でもすぐに取り入れられそうな方法である。

### 3.5. 箸を使う

手指の巧緻性と箸の使い方の関連性を明らかにし、手指の巧緻性を促す遊びを考案している山田明日香は、遊びについて「日常で経験しづらくなった手指の動作は、どの遊びでも対応が難しいようだ」（p.119）と「幼児期における手指の巧緻性と箸の使い方との関連性：手指の発達を促す遊びの開発に向けて」の中で述べている。このことから、鍵盤ハーモニカ演奏時の指の動きをスムーズにするために、箸を用いたトレーニングを導入したいが、その場合は、子どもにとって楽しいと思えるようなゲームの要素を取り入れて巧緻性を高めていけるとよい。ただし、右手でのトレーニングなので左利きの子どもにとっては厳しいかもしれない。

### 3.6. はさみを使う、のりで貼る、紙をちぎる

表現領域の造形表現で使われる動作にも鍵盤ハーモニカを弾くときの下準備やトレーニングとして利用できる動作がある。これらも大いに活用したい。

### 3.7. その他

指あみという指を使った編み物がある。右手は紐や糸を左手の指にひっかけていくだけの動作のため、鍵盤ハーモニカを弾く手は右手であることから、右利きの子どもが多いことを考えると、指あみは鍵盤ハーモニカのトレーニングの観点からは少し外れていると言える。

## 4. まとめ

ここまで、数々の子どもの遊びを挙げてきた。さいごにまとめとして、鍵盤ハーモニカの指導の導入に利用できそうな遊びとして、次の5つを推奨したい。1つ目は、指遊びの『蛙』である(3.1.③)。手の関節を柔らかくし、指と指を分離させることに役立つし、普段の生活の中で使う機会の少ない指を上手に動かすためには演奏前のストレッチが効果的だろうと考えるからである。2つ目は、『指の拍手』(3.1.⑥.6.)を推奨したい。その理由は、幼小連携の点からも、いずれは運指を覚えたほうが便利だからである。運指を覚えるということは、指の番号と自分の手の指が数字で一致するということであり、運指を覚えることと同時に、実際に鍵盤ハーモニカのどの音の上に指を置くかを運指も含めて指導者や保育者の指示通りに演奏しないと結果的に旋律は正しく吹けない。そこで、『指の拍手』で遊びながらトレーニングを積むのがよいのではないかと考える。そして、3つ目に挙げるのは、数え歌の『おべんとうばこのうた』(3.1.①3.)である。その理由は、指導がしやすいからである。子どものほうも難しい旋律を歌わなくてよいので、受け入れやすいのではないと思われる。そして、4つ目として、『とことこにんじゃ』(3.1.①4.)を挙げる。単純な遊びではあるが、指の組み合わせを変えると「教則本」のような動きに似せることができるからである。さいごに、5つ目として、『通しま仙人』の鍵盤ハーモニカ版(3.3.①)を挙げる。理由は、子どもの自発性に期待したいからである。以上、5つの遊びを鍵盤ハーモニカの導入として、運指を覚える前の段階から取り入れたい。これらの遊びの動作は年少児でもできる遊びであることと、これらを卒園まで続けて実施することで鍵盤ハーモニカを演奏するときの下準備が整うのではないかと推察する。また、既に実施している園もあるかもしれないが、すごろく、シール貼り、合格証書、スタンプラリーのように子ども自身が目でも達成感を味わえるような工夫をこらすのが有効であろうと考える。ただ、このとき、子どもたち自身がどのような段階

を踏めばよいのかが分かるように説明してあげてから取り組ませるようにしておくことが重要だろうと思う。目の前の小さな目標をクリアして、小さくても進歩が見えるようにしてあげることで、子どもは楽しんで練習に取り組めるだろう。短期的には、以上のような方法で鍵盤ハーモニカの演奏技術を習得することができるが、幼稚園での表現領域（音楽）では、必ずしも鍵盤ハーモニカの演奏だけを実施させるものではない。年少児はまねっこ遊びから誘導して楽器に親しみ、その中の1つとして鍵盤ハーモニカという楽器があり、その楽器は吹きながら鍵盤を押すと音が出るのだ、という楽器の仕組みを教えるだけでもよいし、（この時、演奏上に必要な知識、例えば指の形、手の形、手の置き方、指の番号などは一切教えない）それと並行して、実際に目の前にないものを想像して頭の中の風景や出来事を直感的に言葉や絵で表出し、それを鍵盤ハーモニカで音にしてみても、更に、次の段階では、自分が聞いた話や誰か身近な人のこと、その他におとぎ話や昔話の主人公のこと、おとぎ話の場面などをイメージして鍵盤ハーモニカで音にしてみてもよい。この時点で子どもは「鋭く息を吹き込むとどうなるか」とか「ゆっくり息を吹き込むとどうなるか」を体感できるだろうし、自分で表現をイメージしながら吹き込む息の強さもイメージできるだろう。このように「音を意識的につくったり、聴いたりすること」ができるようになることで、音楽科以外の生活全般にも良い連鎖が生まれるのではないかと期待する。今後は、幼稚園での表現（音楽）の長期的な目標として、「音楽がその子の生きる力の助けになるように」という願いもあると考えるなら、「音を聴くこと」がどのように子どもの「生きる助け」につながるのか、について鍵盤ハーモニカ指導の点から考えていくと同時に、短期的な技術習得方法について更に検討し、実証したい。

## 5. 【参考文献一覧】

今井弘雄 (2011) 「シニアが楽しむちょっとしたリハビリのための手あそび・指あそび」 黎明書房

NPO法人 エガリテ大手前監修 (2013) 「じいじとばあばのためのあそび図鑑」 共同印刷株式会社

ケロボンズ・藤本ともひこ (2011) 「手あそび大作戦！」 株式会社世界文化社

寺西恵理子 (2014) 「ゆったり遊びじっくり遊び」 ひかりのくに株式会社

藤拓弘監修・ピアノ講師ラボ編著 (2015) 「ピアノレッスンアイデアBOOK」 株式会社ヤマハミュージックメディア

仲田久美子 (2021) 「幼稚園における鍵盤ハーモニカの指導法に関する調査研究—岐阜県内の幼稚園の指導法を手掛かりに—」 岐阜大学教育学部研究報告人文科学第69巻第2号、pp.53-61

西村誠 他編 (2021) 「伝承遊び大百科—現代アレンジで遊ぶ—」 昭和堂

ピコロあそび会議編著 (2015) 「2～5歳児あそびアイデア100」 学研マーケティング

戸次佳子『「迷路—線たどり」における幼児の手指の巧緻性の発達』 (2013) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、人間文化創成科学論叢、第16巻、pp.177-185

山田明日香・木山幹恵・阿部真弓 (2021) 「幼児期における手指の巧緻性と箸の使い方との関連性：手指の発達を促す遊びの開発に向けて」 常葉大学健康プロデュース学部雑誌、第15巻第1号、pp.113-121

レッツ・キッズ・ソンググループ編著 (2004) 「うたって楽しい手あそび指あそび120」 株式会社ポプラ社